【問題提起】― 縄文に共通する「うずまき」文様 ―

問い

1 縄文について、想像をふくらませてみましょう。「なんでこんなにまで鍋、釜を縄の目の模様で飾らなくてはならなかったのか」という問いです。そこでもう少しくわしく文様について考えてみると、一つの共通した傾向が見えてきます。それは「うずまき」文様の存在です。

ヒント（発展的問い）

【考　察】― うずまきはこの世の中の根本存在 ―

具体例

2 うずまき。それは今も昔も私たちの身近にとても多く見つけることができます。子供の頭を見ると、まずつむじがうずまきです。赤ん坊を抱くと、このうずまきしか親の目には入ってきません。ここではうずまきは大切な愛するもの、かけがえのないものと一つになって存在しています。水道の蛇口から勢いよく出た水が排水口へ流れる形もうずまき。これはあまりになじみがありすぎ、言われないと気付かないかもしれません。しかしここにおいてうずまきは、大自然の法則と共にあります。巻貝を真上から見ると、これはもう完全なうずまきです。このうずまきは美と同義です、花を真上から見ます。すると葉や花びらはらせん状、即ちうずまきのように芽をふきながら順番に生えてくることに気付きます。この場合は、はかなく、いとおしい生命としてのうずまきです。

発展的問いの答え（ジャブ）

3 もしかするとうずまきは、この世の中の不思議なこと、美しいこと、自然なことに共通する根本存在かもしれません。そのことを縄文人たちは考えていたに違いないのです。ですから、そのうずまきを自分たちのつくった土器に描くということは、むしろ極めて自然な行為と考えてもよいでしょう。そのようにして、自分たちがつくった人工物を宇宙の現象や事物と一体化させていったわけです。それで大切な食料を煮炊きしたり、実を貯蔵するということは、実にすばらしいことではないでしょうか。

【主　張】― 縄文土器の装飾模様はうずまきを基本にしている ―

4 人里離れた地において、私たちは夜になると満天の星々の中にいることに気付きます。そして、いやでもここが宇宙だと感じるのですが、寝ころんで空を見ていると、体が軽くなって宇宙に浮かんでいるような気になることさえあります。縄文人にとってはそれが日常だったのです。日々の瞬間に、宇宙の中で自分が生きていると感じます。天の怒りのような竜巻きや冬の木枯らしなどのふとした出来事、へびがとぐろを巻いているその恐ろしい様子など、うずまきは森羅万象の様々な形となって彼らの前にあらわれている……。それを自らの造形物に描きしるし、その力を借りようとすることに、何の不思議があるでしょう。

発展的問いの答え（ストレート）

5 私はこのようなことから、縄文土器のほとんど全ての装飾模様はうずまきを基本にして展開していったと考えています。作り手は、うずまきをタテにのばしたり押しつぶしたり横にのばしたりしながらその間を埋めていく。その過程で点を打ったり線を引くなどの新たな意匠がひらめいたり、いろいろな形に変形させたりして、様々に発展させていったのだろうと推測しています。

千住博『美術の核心』二〇〇八・一

要約例

縄文の文様に共通しているのは「うずまき」だ。縄文人はうずまきがこの世の根本存在だと考えた。その力を借りようとして造形物に描きしるしたので、縄文土器の装飾文様はうずまきを基本にして展開していった。（九七字）

※要約のポイント ―― 「全体」と「部分」の関係に注目する

要約とは文章の骨格を理解することです。つまり、文章の成り立ちを理解しなければなりません。成り立ちを理解するためには「全体」を「部分」に分けて、構造を理解していく必要があります。それぞれの部分から重要となるものを抽出し、抽出したものを再度組み合わせると、肉抜きされた繋がりだけが残ります。何と何がどのようにつながっているのかを理解できると良いでしょう。